



Title	異論派兄弟ジョレス＆ロイ・メドヴェージェフによるロシア革命史再審と農業展望：農業・農民史研究の視点から[論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	佐々木, 洋
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	乙第7097号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77999
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yo_sasaki_abstract.pdf, 論文内容の要旨



【論文博士】

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

博士の専攻分野の名称： 博 士（農学）

氏名 佐々木 洋

学 位 論 文 題 名

異論派兄弟ジョレス&ロイ・メドヴェージェフによる
ロシア革命史再審と農業展望
ー農業・農民史研究の視点からー

科学者ジョレスと歴史家ロイのメドヴェージェフ兄弟は、旧ソ連社会の体制的病理を、内側から解き明かし、世界に発信し続けた異論派として知られる。本論は、兄弟が試みたロシア革命史の再審の内容を3つの著書の相互連関と理論の発展を通じて明らかにすることを課題としている。3つの著書とは、共著『フルシチョフ権力の時代』1976、ロイ『10月革命』1979、ジョレス『ソヴィエト農業』1987、である。

特に農業・農民史研究の視点から土地革命ならびに集団化の問題を整理し、1905年のストロイピン改革で創出が目指された「クラーク」の廃絶こそが最終的にはソ連の崩壊へつながったという指摘がメドヴェージェフ兄弟の最大の功績であることを明らかにしている。そして、クラーク、いい換えるならば篤農家の存在こそが、農業の持続的な発展をもたらすという展望を示している。

以上の序章での概説を踏まえて、第1章「共著『フルシチョフ権力の時代』のソ連農業史再検討の試論」では、この共著がフルシチョフ時代の「希望と失望」、「功績と失政」の研究であることを示し、ロシア革命史再審に結実していく論点をとり上げている。第一には、ソ連が穀物輸入増大を金塊売却や原油輸出でカバーしていることへの着目であり、この視点がジョレス『ソヴィエト農業』でも活かされている。第二に、フルシチョフがアメリカのアイオワ州の自営農を招聘してソ連農業の活性化を試みたが挫折したこと、また集団化以後の農村において農民的伝統が失われたことの決定的意味を理解していなかったことへの指摘があり、この視点が兄弟のロシア革命史再審のスタンスに貫かれることを述べている。

第2章は2つの著書についての2つの節からなる。

第1節『『10月革命』ーロシア革命史再考』では、この著書が戦時共産主義の過ちとその根源の考察に中心課題があったことを指摘している。そのなかで、土地革命によって土地を取得した穀作地帯の中農層は、穀物の無償譲渡に納得せず、穀物の自由取引と現物税導入を求めたこと、政権が1918年にネップを導入していれば、反革命勢力との内戦も最小限に留まったと指摘している。このロイの分析は、『フルシチョフ権力の時代』で集団化以降喪失した農民的伝統の体现者がまさにこの中農層であることを示している。また、ロイは、レーニンの戦時共産主義期の過ちが穀物専売など戦時統制を社会主義制度と誤解する一方で、西欧革命が後進ロシアを助けてくれるとの幻想に囚われ、さらにはマルクス・エンゲルスの「社会主義になれば商品も貨幣もなくなる」とのユートピア的理解を鵜呑みにしたと見なしている。ここでは、レーニンの発想や行動の分析に、フルシチョフの性急さや視野の狭さを考察した前著の経験が活かされていることを明らかにしている。

第2節『『ソヴィエト農業』ーロシア革命史再審とソ連崩壊の示唆』では、ジョレスによるこの著書が革命前には穀物輸出大国であったロシアがソ連時代、特に1970年代以降は慢性的な穀物輸入大国へと転落する過程を鳥瞰したソ連農業史研究であると位置づけている。同書はまた、ゴルバチョフ就任の矢先に原油価格が暴落、この衝撃が「産油国」の恩恵で弥縫してきたソ連経済の「アキレス腱」、ソ連農業の慢性的疾患をまさに致命傷として顕在化させ、ソ連そのものを崩壊させてしまうと診断した現代農業史研究でもあるとしている。

しかし、何よりも注目されるのは、ジョレスに当初その意図があった訳でないが、同書が帝政ロシアからゴルバチョフまでの農業・農民史を跡づける過程で、『フルシチョフ権力の時代』および『10月革命』の成果を活かし、それを敷衍することにより一連の「ロシア革命史の再審」を試みる労作となったことにあるとしている。

ジョレスのロシア革命史の再審のうち最重要なのはロシア革命の根本が土地革命にあるという説である。つまり、ロシア革命は、1917年の2月革命により動転した領主が播種期にもかかわらず土地を売却して逃亡したこと、それにより共同体農民が領主の未播種地を占拠して主体的に農耕を開始するという土地革命が先行したという理解である。そして、ソビエト政府は、都市の労働者革命とは別個に異なる目標を掲げて進行していた農村革命を理解せず、戦時共産主義の強行により農民を離反させ、内戦を招いたという解釈を行った点が新たなロシア革命感であると述べている。

第3章「メドヴェージェフ兄弟がロシア革命史再審を成しえた五つの所以」では、第1章、第2章を受けて、メドヴェージェフ兄弟がロシア革命史再審を成しえた五つの所以を指摘している。第一は、歴史研究の選択肢的方法であり、この提起がソ連史学の目的論、決定論の克服に有効であった。第二は、ロシアの割替共同体を分割地所有農民への過渡的形態であると位置づけ、ストルイピン改革からネップ期の「土地法典」までも一貫した流れとして把握したことである。第三は、クラークとは多くの場合家族労働を基本とする富裕農民、篤農家であると認識した点である。第四にはネップ期にはこの分割地所有農民の成長がみられたという事実認識を示した点である。そして、第五にはコンドラーチェフやダニーロフなど「埋もれた」実証文献に着目した点である。

こうして、メドヴェージェフ兄弟は、ネップ期の政権は生産性の高い農民層を振興するため、共同体の狭小な地条の整理統合を奨励し、中農・貧農の多くもこれに呼応しつつあった。したがって、ロシアに土地に執着を強めつつあった個人農、独立自営農民が広く形成されつつあったとの認識に至ったと判断しているのである。

第4章「ソ連社会主義の農業経験からまなぶ世界史的教訓と農業展望」では、ジョレスが提示したソ連農業の失敗とその世界史的教訓をとり上げている。失敗の原因は、集団化が最も生産的で有能な篤農家層を抹殺し、次いで農民層全体をも絶滅したことにあるとしている。これは『フルシチョフ権力の時代』での指摘の再確認でもある。

ジョレスが提示した教訓の一つは、農業とはその地域、地域の気候・自然環境・人間社会の三者の理に叶う関係性であるというものである。もう一つは、農民と大地との絆は私的所有と個人責任性、したがって具体的には独立自営農民の家族労働経営によってしか鍛えられないという教訓である。この教訓は1980年代末に提示されたものであるが、これは現在、人類が問われている持続可能な人間社会の農業展望であるといえる。

終章「結論と展望」では、メドヴェージェフ兄弟が試みたロシア革命史の再審の内容を3つの著書の相互関連と理論の発展を通じて明らかにするという課題についての再整理を行っている。ロシア革命が、労働者の革命とともに、あるいはそれに先行して農村革命を伴っており、この革命の構図を理解しなかったソビエト政権は「戦時共産主義」を強行して、内戦の激化を招いた。また、ネップ期に再び推奨されたストルイピン改革の延長上に位置づく分割地所有農民の育成策が、集団化の強行によって壊滅されたことが、ソ連農業の脆弱化を招き、ソ連崩壊の引き金になったという理解である。本論は、メドヴェージェフ兄弟の労作を農業史・農民史研究の視角から再整理することにより、以上のロシア革命史再審の到達点についてその体系化を試みており、教訓としての分割地所有農民の歴史的意義についての展望も示している。